



Title	戦前の日本における対ユダヤ人政策の転回点
Author(s)	阿部, 吉雄
Citation	言語文化論究    16    p1-13; Studies in Languages and Cultures    16    p1-13
Issue Date	2002-07-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2324/5463">http://hdl.handle.net/2324/5463</a>
Right	

This document is downloaded at: 2013-05-08T16:46:11Z

## 戦前の日本における対ユダヤ人政策の転回点

阿 部 吉 雄

1940年7～8月に在カウナス（リトアニア）領事代理杉原千畝が日本外務省の訓令に背いてポーランドのユダヤ人に日本通過ビザを大量発行し、独ソ戦直前のリトアニアから2000人が脱出するのを可能にしたことは有名である。またこれらのポーランドのユダヤ人のうちの1000人とドイツやオーストリアのユダヤ人1万7000人が日本軍勢力下の中国上海租界に逃れたこと、そして日米開戦から1年余り経過した1943年2月に日本軍の命令で上海北東部の虹口地区に指定された「ユダヤ人ゲットー」に移住を強制されたことも知られている。1930年代後半、水晶の夜事件（1938年11月）に代表されるナチスによるユダヤ人迫害がますます強まり、他のヨーロッパ諸国やアメリカが自国へのユダヤ人の大量流入を警戒してその門戸をますます狭くする中で、ドイツと同じ枢軸国側の日本がユダヤ人受け入れの姿勢を示したことは奇異な印象を与える。その理由はアメリカのユダヤ資本やドイツのユダヤ人の科学技術を満州国や中国の日本軍占領地域の開発のために利用しようとしたいわゆる「河豚計画」に端的に見られるが、日本のこの親ユダヤ人政策へのきっかけになったのが1933年8月に満州のハルビンで起こったあるユダヤ人誘拐事件だった。

『中国の赤い星』（1938）などの著作で有名なエドガー・スノーは1934年2月24日のSaturday Evening Post紙に『日本は新たな植民地を作る』という記事を寄せ、ハルビンの現況を次のように紹介している。「かつて喜びに溢れた町だったハルビンは今日生きたまま死を味わう町として有名である。世界のいかなる主要都市でもこれほど危険なところは恐らくないだろう。約10万人の白系および赤系ロシア人を含め、ハルビンの住人にとって白昼ですら武器を持たずに外出するのは生命を危険にさらすことになる。追い剥ぎ、強盗、殺人、誘拐は日常茶飯事である。外国の領事はボディガードによる身辺警護を受けざるを得ない。満州を旅行していたボストン選出のティンカム下院議員と私はある日スガリ川へ出かけた際、肝っ玉の据わったアメリカ総領事ジョージ・ハンソン氏を訪問した。ハンソン氏の前の小さなテーブルの上にはライフルと機関銃の詰まった箱があり、彼の両側には盗賊の出現に備えて油断なく見張るボディガードたちがいた。私が滞在したモデルン・ホテルのオーナーのヨセフ・カスペ氏は、最近亡くした息子シモンのため悲嘆にくれていた。フランス国籍の才能あるピアニストだったシモン・カスペはロシア人ギャングに誘拐され、30万ドルの身代金を支払わなければ彼の指を切断するという脅迫状が父親のもとに届いた。指の代わりに彼らは両耳を切断し、ついには殺害した。他にも多くの人々がギャングたちによって町から数マイルと離れていないところに監禁されている。」

## 1. 1933年までのハルビンのユダヤ人

スنگリ川（松花江）沿いに位置するハルビン（哈爾濱）は19世紀末まで小さな漁村だったが、1901年ロシアが満州里からハルビンを経てウラジオストクに至る東清鉄道を完成させ、さらに1903年ハルビンから大連に至る支線を完成させたことで、ハルビンは満州におけるロシア人社会の中心となる。人口は1900年の1000人から1903年には30万人へと急増し、ロシア風の街並みが作られる。東清鉄道およびロシア軍関係の商売やロシア満州間の貿易に携わるためにユダヤ人も移住して来るが、兵士として送られた者も200～300人いた。1917年～1920年のロシア革命の際、ボグロム（ユダヤ人の迫害・虐殺）を逃れた数千人のユダヤ人がハルビンに住み着いたため、1910年に1500人だったユダヤ人人口は革命後1万人を超え、1930年には1万3000人に達する。<sup>1)</sup> ハルビンには革命に追われたロシア人貴族層および反革命軍に所属した将校や兵士とその家族などの白系ロシア人もいた。先に引用した1934年のスノーの記事にある「約10万人の白系および赤系ロシア人」の内の多くが白系と考えられる。その一部はロシアファシスト党を名乗り、党首のコンスタンチン・ウラジミロビッチ・ラザエフスキーは「総統」Führerと呼ばれ、彼らのロシア語新聞Nash Putは鉤十字（ナチスの記章）を囲む双頭の鷲（ロシア帝国の紋章）をマークとする。彼らはよく「ユダヤ共産主義」Judocommunismという言葉を使い反ユダヤ主義を標榜したが、彼らの実体はギャング団でありユダヤ人社会にとって悩みの種だった。しかし満州事変で1932年2月に日本軍がハルビンを占領するまでは「ユダヤ人の黄金時代」が続き、ハルビンは満州だけでなく中国や日本を含む極東におけるユダヤ人社会の経済的・文化的・宗教的中心であった。<sup>2)</sup>

占領以前、日本資本はハルビンの製造業の8%を占めるに過ぎず、中国人が58%、白系ロシア人とユダヤ人で33%を占めていた。しかし占領後2年以内に日本はすべての造船会社とそれまでユダヤ人が中心だった大豆や製粉業の多くを押さえる。また穀物取引所を再編成し、ユダヤ人が常に理事長に選ばれ理事も13人中8人を占めていたのを日本の管理下に置く。1939年までに日本資本は主要な業種の12%を占め、ハルビンの全貿易の約30%を扱うようになる。1918年から1931年まで4000人前後で推移していたハルビン地域の日本人人口は、1932年7036人、1933年1万1856人、1934年1万9117人、1935年4万6628人、1936年5万4725人、1937年6万7559人と一本調子で増え続ける。<sup>3)</sup>

日本はハルビンの経済活動から外国人を締め出すだけでなく、彼らに対してテロ活動も行った。日本の諜報部のために働くことを強制されたイタリア人元ジャーナリストのアムレト・ベスパは『日本の秘密情報員—日本帝国主義の紹介』（1939）という暴露本を書き、ハルビンを初めとする満州各地で頻発した裕福な中国人やユダヤ人を狙った身代金目的の誘拐事件の多くは日本の諜報部、憲兵隊、警察が組織の資金調達や個人的利益のためにロシア人や中国人のギャングを雇って行ったものだと証言している。<sup>4)</sup> 彼はハルビンで起こった事件だけを挙げているが、例えば富豪のワン・ユウチンは息子の身代金として25万ドル、自身のために50万ドル支払う。商人のチェン・チンフウは3度誘拐され、そのたびに20万ドル、20万ドル、10万ドル払う。デパート経営者のモウ・ウェイタンは2度誘拐され、そのたびに10万ドル。カセム・バーク博士は日本の憲兵隊配下のギャングにより2度誘拐され、そのたびに高額の身代金を払う。エリソン博士も同様。商人のタラセンコは憲兵隊により

誘拐され1万5000ドル払った後、今度は市の警察によって誘拐され5000ドル払う。商人のチスミニツキーは1万5000ドル。エスキンは1万ドル。シュレル・ド・フローランスはシナゴグを出たところを武装した6人に襲われる。この誘拐は200人以上の目撃者の前で起こったにもかかわらず、憲兵隊に雇われたロシア人の犯行であることを知っていた警察は干渉することを避けた。暗い地下室に105日間監禁され、2万5000ドル払って解放される。憲兵隊の隊長からポーランド人学校の男子生徒を誘拐するよう命令された2人のロシア人と1人の中国人は人違いをして、カトリック教会が保護していた孤児ヴァレンチン・タナーイエフをさらう。憲兵隊長は解放することを拒否し、「カトリック教会は金がある。その子供が貧しければ、教会に払わせろ。」と言い、キーロン司教が2000ドルを払って2カ月の監禁の後解放される。

ベスパはユダヤ人コフマンの誘拐には自分が関わったと明言している。1932年3月11日の夜10時頃、数人のロシア人がこの薬種商を誘拐しハルビンの新市街地にある憲兵隊の地下室に運んだ。翌12日、家族に対して3万ドルの身代金を要求するメモがロシア語日刊紙Ruporに届けられる。同日夜、ロシア人実行犯たちは人質を地下室から車で10分ほどの郊外にある中国人のみすぼらしい家に移す。身代金の額について意見を求められたベスパは、コフマンは資産家だが現金は余り持っていないため家族は3万ドルを払えないだろう、また市内では憲兵隊の仕業と噂されていると述べるが、諜報部の日本人上司は「噂などに興味はない。コフマンが思ったほどの金持ちでないなら、ユダヤ人協会が金を集めればよい。」と言う。結局、憲兵隊は身代金を1万5000ドルに減額しようとするが、先述のロシアファシスト党党首のラザエフスキーが、コフマンの経済状態について確かな情報がある、自分に任せてくれれば3万ドルを取ってみせると主張し、キリチェンコというロシア人および民間人の服装をした2人の日本人憲兵とともにコフマンが捕らえられている家へ向かう。しかし翌日の昼前にベスパは上司からコフマンの死を知らされ、憲兵隊に連絡しておくから様子を見て来るようにと命令される。憲兵隊本部に行き、そこから憲兵隊軍曹とともに民間用自動車で送られた現場には前日の4人の他にカルスコという名のロシア人がいた。死体の顔は拷問による火傷のためほとんど見分けがつかず、焼けた肉の臭いが吐き気を催させる。妻に電話をかけることも手紙を書くことも拒否したコフマンの両手、両足にラザエフスキーが火を押しつけ、さらに顔を焼き焦がすと、激しい苦痛の余りコフマンが叫び声を上げたため、猿ぐつわをはめて力一杯締め付け、あげくに窒息死させてしまったのだ。コフマンが大柄だったため憲兵隊は遺体を4つに切断し、ハルビンの路上で発見される麻薬による死亡者を放り込むために掘られた溝に捨てる。しかしコフマンの家族との身代金交渉は続けられ、3週間後妻は1万8000ドルを払う。

## 2. カスベ事件

コフマンの誘拐から1年半後、先のスノーの記事で紹介されたシモン・カスベ誘拐事件が起こる。シモンの父親のヨセフ・カスベは日露戦争において騎兵連隊で戦った後、ハルビンで小さな時計修理店を始めた。数年のうちに宝石や銀具を扱うようになり、1918年には極東で最も高級な宝石店のオーナーであると同時にハルビンで最高級のモデルン・ホテルの共同経営者になっていた。1932年日本軍が占領した時、ヨセフは宝石店の他にいくつ

もの劇場や映画館を所有し、モデルン・ホテルの単独経営者であった。彼の資産は50万ドルとも数百万ドルとも言われ、2人の息子はフランスのパリ大学とコンセルヴァトワールに留学していた。彼は自分の資産が合法・非合法の手段で日本人に奪われるのを防ぐため、息子たちにフランス国籍を取得させ、その手続きが完了すると直ちにモデルン・ホテルとすべての劇場を彼らの名義に書き換える。以後これらの建物にはフランスの三色旗が掲げられる。日本人に手出しされないようにアメリカやイギリスの国籍を取り、所有する不動産に星条旗やユニオンジャックを掲げる者は珍しくなかった。

コンセルヴァトワールを優秀な成績で卒業したシモンはハルビンに一時帰国する。父親は自分の最高級の劇場で息子の帰国リサイタルを開くが、それに先立って耳の肥えた聴衆がいるマニラと上海と東京で演奏旅行をさせている。日本の憲兵隊や警察といえどもフランス市民には手が出せないだろうと油断していたが、シモンの動向は外出や帰宅の時間、一緒に外出する女性たちの名前と住所、彼が車を走らせる道筋までつぶさに調べ上げられていた。諜報部の日本人上司からフランス領事レノーとカスペ家は親密な関係かと尋ねられたベスパは、両者の間に何らかの親交があるとは思わないと答える。1933年8月24日の深夜、シモンはユダヤ人の娘を家まで送り、車を停めたところを憲兵隊配下のロシア人ギャングたちによって拉致され、ハルビン近くの隠れ家に連れ去られる。

翌25日、犯人からの手紙による30万ドルの身代金の要求をヨセフは拒否する。彼から助力を請われたフランス領事は日本当局に事件解明を求める公式文書を送るが、日本側はシモンの発見に最善を尽くしていると回答。1ヵ月余り経った9月28日、シモンの切断された両耳が送られてきて、ようやくヨセフは息子が無事に帰れば3万5000ドルを払うと返答する。

フランス領事が文書を送る以上のことをしなかったのに対し、若くて頭の切れる副領事シャンボンに独断で調査員を雇い、事件の真相を知る。彼は証拠を得るため調査員たちに命じて、シモンを誘拐したロシア人ギャングの中で一番若いコミサレンコを捕らえて領事館に連れて来させる。コミサレンコは自白しただけでなく、それを書面にし署名した上で解放される。翌日副領事は自ら警察署長に面会し、誘拐に携わったすべての人物に対する公式の告発状とコミサレンコの自白の写しを提出する。警察から連絡を受けた憲兵隊はただちにコミサレンコから事情を聞き出し、副領事に雇われた調査員たちをハルビンから600キロ離れたソ連国境の町バグラニーチナヤ（綏芬河）まで追って逮捕する。翌日から親日的なロシア語新聞のHarbinskoe VremiaとNash Putはシャンボンに「薄汚いユダヤ人」、「共産主義者」と呼んで数週間に渡って侮辱的な攻撃を加え、ついにはロシアファシスト党のメンバーがシャンボンに決闘を申し込む事態にまで至る。

シモン・カスペ誘拐のニュースは外国にも伝わり、アメリカ、イギリス、フランスの新聞が報道する。国際世論を気にした東京からの指示で、ベスパの日本人上司はシャンボンが警察署に出したコミサレンコの自白供述書に記されている誘拐犯たちの逮捕を命ずる。10月9日マルチノフとシャンダルという2人のロシア人が捕らえられるが、シモンの居場所は知らないと言明する。また他の者たちは発見できないとされる。

その間シモンは父親に何十通もの手紙を書くが、ヨセフは支払いに応じなかった。一方日本側にすれば、シモンは憲兵隊の将校や諜報部に雇われた日本人の顔を見ているため、生きたまま返すことはもはや不可能だった。しかし身代金を奪うことは諦めず、30万ドル

から15万ドル、10万ドル、7万5000ドル、5万ドルと要求額を引き下げるものの、ヨセフは息子が生きて戻った場合のみ3万5000ドルを払うという主張を変えない。

シモンを監禁していたロシア人ギャングたちは交代に来るはずの仲間が11月28日鉄道警察に逮捕されたことを知らされず、仲間が現れないため不安になる。その中にコフマン誘拐にも関与したカルスコがおり、彼はシモンと個人的に取引しようとするが、父親にシモンの手紙を届けるためハルビンへ行ったところを仲間らに感づかれ射殺される。憲兵隊は、彼を逮捕しようとした警察によって射殺されたと発表。諜報部に雇われた日本人はシモンを見張るロシア人キリチェンコ（やはりコフマン誘拐に関与）に殺害を指示し、憲兵隊が与えた偽造パスポートと金で北へ逃亡させる。しかし12月18日鉄道警察により逮捕される。

12月3日憲兵隊はシモン・カスベの死を公表する。浅い溝の中に捨てられた遺体は数インチの土で覆われていた。24歳の青年は3ヵ月以上におよぶ監禁生活で骨と皮だけになり、本人と確認することも困難だった。体を洗うことも、髭を剃ることも、髪を切ることもなかった。両耳が切り取られていただけでなく、11月には零下25～30度に達するハルビンの寒さは頬、鼻、手を凍らせ、肉片が落ち、壊疽が起こっていた。<sup>5)</sup> 息子の誘拐の報を受け、病を押してパリからハルビンに向かっていた母親は12月3日に上海に着き、翌4日North-China Daily News紙で息子の死を知る。

### 3. カスベ事件の反響

シモン・カスベの残虐非道な殺害に対してハルビンでは日本軍当局が公然と非難され、ハルビンユダヤ人協会の会長アブラハム・カウフマン博士が中心となっていくつもの抗議集会やデモが行われた。シモンの葬儀の日には憲兵隊250名と歩兵1連隊がチチハル（齊齊哈爾）から増強され、兵士と警官が市内各所に配置される。大通りの使用を禁じられた葬列は狭い脇道を進んだが、ユダヤ人だけでなく、ロシア人、中国人、朝鮮人、日本人などすべての民族グループ数千人が従った。カウフマン博士が弔辞を述べ、卑怯な殺害者たちと彼らを陰で操っている者たちを激しく非難した。翌日彼は日本憲兵隊に召喚され、満州から追放すると脅される。ロシアファシスト党党首のラザエフスキーはNash Put紙に長い記事を掲載し、父親（ヨセフ・カスベ）が第3インターナショナルのスパイである薄汚いユダヤ人を殺すという正義の行為を行った愛国的ロシア人たちを侮辱したカウフマン博士を逮捕すべきだと要求した。

日本軍当局は誘拐犯6名を司法に引き渡さず、「安全上の理由から」刑事警察に15ヵ月間留置する。彼らの食事は近くのレストランから運ばれ、友人や家族との面会も毎日許される。夜間は留置場から出されて、憲兵隊のために新たな誘拐その他の犯罪を行っているという噂もあった。犯人たちの逮捕に功績のあったフランス副領事シャンボンに日本側から「好ましからぬ外交官」*persona non grata*と宣告され、フランス政府により天津の領事館に移動させられる。さらに警察署長の江口が作成した事件の報告書では、6人の誘拐犯が正直で非の打ち所のない市民であり、共産主義との戦いに人生を捧げてきた真の愛国的ロシア人だとした上で、この誘拐の目的は個人的な利益ではなく、彼らの組織がボルシェビズムに対する高貴な戦いを続けるための資金を得ることだと説明する。シモン・カスベの殺害は既に死亡しているカルスコの犯行と断定。シモンの父ヨセフを共産主義者のために

働くユダヤ人スパイ、盗品故売者、社会の敵と決めつけた。

この報告書を見てハルビンに駐在する各国領事団は「厚顔無恥だ」と憤りを表明し、満州以外からも批判が高まった。1904年創刊の国際的なユダヤ人月刊誌で、上海のシオニスト協会および上海民族基金委員会の公式機関誌Israel's Messengerの編集者ニシム・エズラ・ベンヤミン・エズラは重光外務次官に書簡を送り、1934年8月24日には東京で面会して、ハルビンの白系ロシア人による反ユダヤ主義的煽動に抗議する。<sup>6)</sup> 上海のユダヤ人社会は1934年12月18日抗議集会を開く。エズラはさらに1935年10月30日Shanghai Times紙の編集部に宛てた公開書簡において、ユダヤ教の最も神聖な祭日ヨーム・キップールである10月7日にハルビンのシナゴークと大連のラビ（ユダヤ教の導師）・レビンの家で日本の警察により「武器および禁止された文献」の捜索が行われたことへの公的謝罪を要求する。1936年4月29日、英国ユダヤ人代議員評議会の合同委員会とアングロユダヤ人協会は駐英日本大使にハルビンにおける白系ロシア人の反ユダヤ人デモとユダヤ人実業家の大量逮捕に対する公式抗議を送り、この大量逮捕は賄賂を強制するため虚偽の違反行為をでっち上げたものだとした。同様にアメリカユダヤ人委員会は駐米日本大使に抗議文を提出し、委員会の会長は日本が事態の改善のため適切な行動を取るよう希望する旨を公式に表明した。

1935年3月国際世論を配慮した東京からの指示で、ハルビンの日本憲兵隊と警察は犯人たちをしぶしぶ満州国の裁判所に引き渡す。日本側からの裁判所への圧力や、情報提供者に対する憲兵隊やロシアファシスト党による脅迫にもかかわらず、1936年6月3人の中国人裁判官は4人の被告に死刑、2人に終身刑を言い渡した。ハルビン全市が歎びに沸き立ったが、判決の2日後憲兵隊は裁判長を逮捕し判決の無効を宣言する。6ヵ月後、この事件の再審理を行った3人の日本人裁判官は告発を棄却し「愛国的動機から行動した」被告全員を釈放した。<sup>7)</sup> 日本の決定を批判した英国籍新聞2紙は直ちに差し押さえられ、編集者たちは満州から追放された。

#### 4. 日本のユダヤ人政策の変更

日本が国政レベルでユダヤ人と初めて関わったのは、日露戦争の戦費の調達にアメリカのユダヤ人金融資本家ジェイコブ・シフが大きく貢献したことに遡る。彼はロシアのユダヤ人を迫害するロシア皇帝を嫌っていたことと、投資銀行を営み勝ち目の薄い側（この場合は日本）に賭けるのを好んだことから、3つの戦時債全5200万ポンドの半分を自分の銀行Kuhn, Loeb & Co.を通して融資する。他の半分はイギリスのユダヤ人同業者が引き受ける。4番目の3000万ポンドの借款はイギリスとドイツのユダヤ人同業者とシフ自身の金銭上の関係者が共同で引き受けた。シフはさらに1905年と1912年にも借款を引き受けている。日本の国難を救ったこの出来事はユダヤ人の巨大な資金力と国際的な連携に関する日本人の原体験になった。

シフと日本の政治指導者や財界との密接な関係が、上述した1917年～1920年のロシア革命に伴うボグロムを逃れたユダヤ人たちを救うことになる。アメリカへの移住を希望しハルビン経由で日本に向かったものの、ビザ取得が様々な理由で困難だったり、所持金が底をついたり、病気に罹ったりしてウラジオストク、敦賀、横浜などの港町で立ち往生するユダヤ人難民は数千人に上った。日本政府はシフの依頼により難民救援組織のために便宜

を計る一方、ウラジオストクを支配する反革命軍のセミョーフ将軍が反ユダヤ主義者だったため、内田外相がシベリアの日本軍司令官に対しユダヤ人へのいかなる暴力行為も許さぬよう指示した。20年後の杉原ビザによる2000人のユダヤ人難民救出の原型がここにある。

シベリア出兵によりセミョーフらの反革命軍と接した日本軍将校たちは、白系ロシア人から『シオン賢者の議定書』を始めとする反ユダヤ主義を学ぶ。ロシア革命の主要人物にユダヤ人が多かったことから、白系ロシア人はユダヤ人＝共産主義者という観念を日本人将校たちに植え付けた。満州進出を狙う日本におけるユダヤ研究は事実上この時期に始まる。元々シフ体験によりユダヤ資本の巨大さと各国ユダヤ人間の民族的連帯について神話的観念を抱いていた日本人は、資本主義国家と共産主義国家にまたがるユダヤ人による国際的支配という構図を信じ込んでしまう。

満州事変におけるハルビン占領により、日本は初めて1万人以上ものユダヤ人社会を自らの支配地域に抱え込むことになる。満州事変後の数年間、ユダヤ人は本稿で紹介したように現地の憲兵隊や警察がその資産を合法または非合法な手段で取り上げる対象でしかなかった。カスベ事件の裁判の結末を見れば、その姿勢は少なくとも1936年まで続いていたことが分かる。しかしこの時期、いくつかの要因により日本政府のユダヤ人政策は転回点を迎えていた。

### (1) ナチスドイツによるユダヤ人迫害

ナチスドイツによるユダヤ人迫害に抗議して世界の、特にアメリカのユダヤ人輸入業者が行ったドイツ製品ボイコットはドイツの外貨不足を招く一方、日本製品への需要を増やした。このことは日本人にとってユダヤ人の経済的影響力と国際的連帯を裏書きするものであった。しかし1936年11月の日独防共協定により日本がドイツと同一視される状況が生まれ、カスベ事件を始めとする満州でのユダヤ人迫害に対して上海、アメリカ、イギリスのユダヤ人から非難が沸き上がる事態が続けば日本の経済的利益が損なわれると懸念された。

### (2) ドイツのユダヤ人5万人の満州入植計画

建国間もない満州国は開発を進めるため人材と資本を必要とした。外務省の前国際連盟政治部責任者で日本政府のスポークスマン杉村弥太郎は1934年、ユダヤ人迫害政策を進めるドイツから5万人のユダヤ人技術者や資本家を満州に移住させる案を発表する。<sup>8)</sup> この計画は大陸に進出した新興財閥の日産コンツェルンを率いる鮎川義介、満州事変の首謀者石原莞爾中佐と板垣征四郎大佐（階級はいずれも事変当時）、満鉄総裁の松岡洋右にも支持される。「五族協和」を謳う満州国や日本がカスベ事件により反ユダヤ的だという印象を与えてしまうことだけは何としても避けねばならなかった。

### (3) 東支鉄道（北満鉄道）の買収

帝政ロシアが建設した東清鉄道は清朝が倒れると東支鉄道と呼ばれるようになるが、その運用と所有権はソ連に継承された。これは鉄道だけでなく、満州里からハルビンを経てウラジオストクの手前のパグラニーチナヤ（綏芬河）へ至る1400キロメートル、ハルビンから新京（現長春）へ至る250キロメートルの路線の両側16キロメートルが租借される巨大

な権益だった。<sup>9)</sup> ソ連にとっては満州国の建国により遅かれ早かれ日本に接収される運命にある東支鉄道を売り渡すことは悪い取引ではなかったし、日本にすれば満州国内にソ連が権益を所有し、共産主義思想を広める拠点が存在することは好ましくなかった。1933年6月に開始された東支鉄道（この時点から北満鉄道と呼称が変わる）の譲渡交渉は1億4000万円で満州国が買収することで決着し（他にロシア人従業員の退職金が3000万円）、1935年3月に東京で日本、ソ連、満州の代表により調印される。<sup>10)</sup>

これにより2万人のロシア人鉄道従業員がソ連へ帰国した。満州に4万人いたいわゆる赤系ロシア人の中核がいなくなったことで、日本にとって白系ロシア人を保護する意味が薄れ、相対的にユダヤ人の重要性が増した。<sup>11)</sup>

一方現地では外国人実業家への締め付けの上に、カスペ裁判の結末に絶望してユダヤ人たちがハルビンを捨て国際都市の天津や上海に逃げ出し、ユダヤ人人口は1930年の1万3000人から1939年には5000人に減少した。<sup>12)</sup> 士官学校で石原（1937年9月、第2次上海事変の拡大に反対して東京の参謀本部第1部長（作戦担当）を辞任し、参謀副長として関東軍に戻り、新京に着任）と同期の樋口季一郎少将は1937年8月ハルビン特務機関長に着任するとユダヤ人に対して融和的態度を取り、12月に日本人、満州人、ユダヤ人の協力関係を謳う第1回極東ユダヤ人会議を、やはり石原と同期だった安江仙弘大佐の指導の下開催させる。会議にはハルビンユダヤ人協会の700人が参加した他、天津、奉天（現瀋陽）、ハイラル（海拉爾）、神戸のユダヤ人社会からも21人の代表者が送られた。<sup>13)</sup> この会議において極東ユダヤ人評議会の設置が正式に決定され、カウフマン博士が議長に選出されたが、それはこれまで白系ロシア人社会の一部として扱われてきた満州のユダヤ人社会に自律的な地位を日本が認めることを意味した。<sup>14)</sup> 樋口は1938年8月参謀本部第2部長（情報担当）に就任し東京に帰るが、極東ユダヤ人会議は1938年12月に第2回、1939年12月に第3回が開催される。

安江は1938年1月に初代大連特務機関長に就任し、さらに日本人とユダヤ人の親睦団体としてハルビンに設立された世界民族文化協会<sup>15)</sup>の会長になる（カウフマン博士が顧問）。安江は大連着任早々の1月21日、石原の支持を得て関東軍司令部の名前で「現下ニ於ケル對猶太民族施策要領」を作成している。その目的は「猶太民族ニ對シテハ現下時局ノ推移ニ伴ヒ擡頭シツツアル在極東猶太民族ノ日滿依存傾向ヲ利導シテ之ヲ世界ニ散在スル彼等同族ニ及ボシ以テ彼等ニシテ功利的術數ヲ抛チ眞ニ正義公道ヲ基トシテ日滿兩國ニ依存スルニ於テハ之ヲ八紘一宇ノ我大精神ニ抱擁統合スル」とし、満州のユダヤ人を利用して外国の、特にアメリカのユダヤ資本を呼び込もうとするまさに功利的術数である。実際の活動はユダヤ人の多い大連、奉天、ハルビン、ハイラルの各特務機関による「内面工作」、  
「裏面的工作」とし、その内容は「一、宗教的ニ猶太民族ノ融合ヲ計ル爲猶太教會ニ對シ裏面的援助輔導ヲ與フ。二、各集團地ニ於ケル中心的猶太人中我方ニ適當ナルモノヲ先づ個人的ニ把握シ之ヲ核心トスル同民族ノ結合ヲ計ルト共ニ之ヲシテ哈（ハルビン）市中央本部ノ統制下ニ入ル如ク指導ス。三、紐育（ニューヨーク）及ワルソー（ワルシャワ）ニ於ケル猶太大會或ハ天津、上海ニ於ケル猶太人ヘノ工作ハ哈市特務機関長ニ於テ之ヲ行ハシム」、日本と満州国の各機関は「猶太人ナルガ故ノ壓迫ハ之ヲ取締」とユダヤ人保護の姿勢を示していた。<sup>16)</sup>

日本の政策転換の恩恵を受けたのはハルビンや満州のユダヤ人だけでなかった。1938年

3月にナチスドイツがオーストリアを併合した頃からアメリカや上海租界へ移住するユダヤ人が増え始め、水晶の夜事件が起こった1938年11月以降は出国を希望する人々でドイツの旅行会社はパニック的状況となった。日本を經由してアメリカへ移住した人々はシベリア鉄道でユーラシア大陸を横断し、ソ連が極東に設置したユダヤ人自治区ビロビジャンを経てウラジオストクに至り、船で敦賀に渡った。上海を目指した人々の多くはイタリアからの海路を利用したが、シベリア鉄道を利用する者もいた。こちらは途中から東支鉄道（北満鉄道）に入り、ハルピンを經由して大連から船で上海に向かった。しかし上述の「現下ニ於ケル對猶太民族施策要領」が既にあったものの、1938年3月の時点では満州国はドイツとの関係を重視する関東軍内の勢力への配慮からユダヤ人の入国を認めず、満州里のソ連側の国境駅オトポールで極寒の中多くの人々が立ち往生する事態になった。これも樋口が満州国外交部と掛け合せて入国を認めさせ、以後は通過ビザが円滑に発給されるようになる。<sup>17)</sup>ドイツがわずかに10マルクしか国外への持ち出しを認めなかったため、ほとんど無一文で極東にたどり着いた難民たちを極東ユダヤ人評議会の代表が満州里で出迎え、ハルピンでは通過者に食事、宿泊、資金を提供する支援委員会が迎えた。最初の数年間はハルビン、大連、天津、青島に住み着く者もいた。

ユダヤ人保護への日本の政策転換の仕上げは、水晶の夜事件から1ヵ月と経たない1938年12月6日の近衛内閣の五相（近衛文麿首相・池田成彬蔵相・有田八郎外相・板垣征四郎陸相・米内光政海相）会議で板垣が提案し決定された「猶太人對策要綱」である。すなわち日独伊防共協定のパートナーであるドイツ、イタリアの反ユダヤの立場に配慮しながらも、「帝國ノ多年主張シ来レル人種平等ノ精神ニ合致」すべく、「一、現在日、滿、支ニ居住スル猶太人ニ對シテハ他國人ト同様公正ニ取扱ヒ之ヲ特別ニ排斥スルカ如キ處置ニ出ツルコトナシ。二、新ニ日、滿、支ニ渡來スル猶太人ニ對シテハ一般ニ外國人入國取締規則ノ範圍内ニ於テ公正ニ處置ス。三、猶太人ヲ積極的ニ日、滿、支ニ招致スルカ如キハ之ヲ避ク、但シ資本家、技術家ノ如キ特ニ利用價值アルモノハ此ノ限りニ非ス。」とした。<sup>18)</sup>

「現下ニ於ケル對猶太民族施策要領」が満州国内の工作活動のレベルで策定されたのに対し、「猶太人對策要綱」は日本、満州、中国における政策レベルの決定である。その意図は1938年12月26日の第2回極東ユダヤ人会議に合わせて日本の親ユダヤ人政策をアピールすることにあつたと考えられる。しかしアメリカのユダヤ人資本家は満州に興味を示さず、上海のサッスーン（英国籍）財閥などは資本を外国へ移していた。また満州への移住が認められたユダヤ人もせいぜい数百人であり、その中には上海租界に来た難民が雇用やよりよい生活条件を求めて満州へ移る例がかなりあった。「猶太人對策要綱」の効果は別のところで現れる。1938年11月の水晶の夜事件以降急増した上海租界へのユダヤ人難民の流入に対して、1939年夏に上海のユダヤ人社会から規制を要請されるまで現地の日本当局が積極的な制限策を取らなかったため、最終的に1万7000人のドイツ脱出が可能になった。<sup>19)</sup>さらに在カウナス（リトアニア）領事代理杉原千畝（1940年7～8月）や駐ベルリン満州国公使館書記官王替夫（1939年6月～1940年5月）らが大量発行した日本や満州国通過ビザにより数千人のドイツおよびポーランドのユダヤ人が極東に逃れた。<sup>20)</sup>

## 終わりに

1937年以降明確な形を取り始めた日本のユダヤ人保護政策は主にアメリカを意識したものだ。満州国樹立と国際連盟への脱退通告により日本は国際的孤立の道を歩み始めるが、石油、機械、屑鉄などの戦略物資は依然アメリカからの輸入に依存していた。そこで満州のユダヤ人社会を保護することによりアメリカのユダヤ資本を満州の開発に利用し、さらに人と資本をいわば人質に取ることでアメリカ政府に対するユダヤ人の影響力（これを日本は最後まで過大評価し続け、逆にユダヤ人のアメリカ政府に対する忠誠心を過小評価し続けた）を利用してアメリカの対日政策を日本にとって有利な方向に導こうとした。これについては別の機会に論じたい。

それゆえカスベ事件が起こらなくても日本がユダヤ人保護へ政策を転換した可能性はある。しかしこの事件の残虐性と裁判の不当な判決がアメリカやイギリスのユダヤ人からの批判を招き、満州や中国のユダヤ人社会の動揺を引き起こした。そこでそれまで『シオン賢者の議定書』などを基に空想的・観念的な反ユダヤ論を発表していた陸軍の安江仙弘大佐（ペンネーム包荒子を併用）や海軍の犬塚惟重大佐（ペンネーム宇都宮希洋を併用）がユダヤ問題の専門家として現実のユダヤ人への対処を任された。これらの反ユダヤ論者が今度はユダヤ人の資金力、科学技術、民族的連帯、アメリカやイギリスでの影響力を利用すべきだと主張するようになる。彼らの進めた対ユダヤ人工作の結果、1937年～1941年の日本は世界でも（少なくとも枢軸国として）珍しいほどのユダヤ人保護政策を取る国となった。

## 注

- 1) デイッカー (Herman Dicker 『Wanderers and Settlers in the Far East. A Century of Jewish Life in China and Japan』, Twayne出版, 1962年), 22ページ。
- 2) 「北満に於ける白系露人投資とその活動状況」(哈爾濱日本商工会議所発行昭和十一年哈商特別調査資料第二号)によれば1936年にハルビンでユダヤ人が経営する企業は112を数え、1910年以前に設立されたもの4, 1911年～1920年16, 1921年～1930年71, 1931年～1935年21と、第1次大戦後と満州事変の間に急増したことが分かる。杉田六一『東アジアへ来たユダヤ人』, 音羽書房, 1967年, 40ページ。デイッカー, 22ページ。
- 3) 副島圓照「戦前期中国在留日本人人口統計」, 『和歌山大学教育学部紀要, 人文科学』(33) 1984年, 和歌山大学教育学部, 16ページ。
- 4) 日本の諜報部とは特務機関を指していると考えられる。ベスパは上司の名前を示していないが、その記述を信じれば奉天特務機関長土肥原賢二大佐の上官にあたり、ハルビン特務機関長の安藤麟三少将とは別の人物ということになる。この暴露本がどこまで真実を伝えているかは不明だが、歴史的事件に関する記述は事実には忠実であると考えられる。
- 5) トケイヤーによれば「かつて鍵盤の上を走った指はことごとく折られ、爪がはがされていた。」マービン・トケイヤー, メアリ・シュオーツ『河豚計画』(加藤明彦訳), 日本ブリタニカ, 1979年, 48ページ。

- 6) ディッカー, 37ページ。克蘭ズラーによれば重光次官と面会したのはカウフマン博士となっている。克蘭ズラー (David Kranzler 『Japanese, Nazis & Jews—The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945』, KTAV出版, 1988年), 213ページ。
- 7) トケイヤーによれば日本人裁判官が下した判決は「10年から15年の不定期刑。しかも1週間後には特赦で、全員が釈放されてしまった。」トケイヤー, 48ページ。
- 8) ユダヤ人が資本をドイツから国外へ持ち出すことは不可能であったため、資本家についてはむしろアメリカのユダヤ人を意識するようになる。
- 9) 新京以南は1905年のポーツマス条約で日本に譲渡され、南満州鉄道となった。
- 10) この買収交渉に事務方の中心人物としてあつたのが、ハルビンに置かれていた満州国外交部に外務省から派遣されていた杉原千畝だった。彼はカスベ事件の一部始終を間近で見ていたことになる。
- 11) 日本のユダヤ人政策の転換の手始めとして、ロシア人ギャング団は満州国外に追放され、反ユダヤ的なロシア語新聞Nash Putは廃刊させられる。
- 12) ディッカー, 23ページ。レビンは1935年で既に5000人に減少したとする。ヒレル・レビン『千畝』(諏訪澄, 篠輝久訳), 清水書院, 1998年, 85ページ。
- 13) 当時日本の支配下になかった上海や香港のユダヤ人社会は代表を送らなかった。1938年の第2回会議の公式報告は存在しないが、1939年の第3回会議には神戸、青島、上海、天津、大連、奉天、チチハル、ハイラルから19人の代表が参加した。ディッカー, 45ページおよび58ページ。
- 14) ディッカー, 45ページ。極東ユダヤ人評議会を恒久的にハルビンに置くと決定されたため、ヨーロッパからの難民流入により上海のユダヤ人人口が2万人を越えても、ハルビンは極東のユダヤ人社会における指導的地位を保ち続けた。
- 15) 1948年5月のイスラエル共和国建国の後、社団法人日本イスラエル協会に改称。樋口季一郎『陸軍中将樋口季一郎回想録』, 芙蓉書房, 1999年, 364ページ。
- 16) 中日新聞社会部編『自由への逃走—杉原ビザとユダヤ人』, 東京新聞出版局, 1995年, 200~201ページ。
- 17) 樋口, 352ページおよび363~364ページ。中日新聞社会部, 124~125ページ。
- 18) 中日新聞社会部, 202ページ。
- 19) 阿部吉雄「上海のユダヤ人ゲット—設置に関する考察」, 『言語文化論究』(15) 2002年, 九州大学大学院言語文化研究院, 49ページ。
- 20) 杉原が発行した日本通過ビザは2139通。レビン, 316ページ。王が発行した満州国通過ビザは約1万2000通。王替夫『見過希特勒与救過猶太人的偽滿外交官』, 黒竜江省人民出版社, 2002年, 165ページ。バルハフティクによれば1940年7月~1941年5月にドイツから日本に到着したユダヤ人難民は2498人。その一部は上海租界へ移住した1万7000人に含まれる。また1940年7月~1941年8月にリトアニアから日本に到着したユダヤ人難民は2718人。他に200人が日本を経由せず直接上海へ行った。ゾラフ・バルハフティク『日本に来たユダヤ難民』(滝川義人訳), 原書房, 1992年, 160ページおよび172ページ。

## 参考文献

- Amleto Vespa: "Secret Agent of Japan. A Handbook to Japanese Imperialism". London (Victor Gollancz Ltd) 1939.
- Herman Dicker: "Wanderers and Settlers in the Far East. A Century of Jewish Life in China and Japan". New York (Twayne Publishers, Inc.) 1962.
- 杉田六一『東アジアへ来たユダヤ人』, 音羽書房, 1967年。
- マービン・トケイヤー, メアリ・シュオーツ『河豚計画』(加藤明彦訳), 日本ブリタニカ, 1979年。(Marvin Tokayer/Mary Swartz: "The Fugu Plan". New York. Paddington Press. 1971.)
- David Kranzler: "Japanese, Nazis & Jews - The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945". Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976).
- ゾラフ・バルハフティク『日本に来たユダヤ難民』(滝川義人訳), 原書房, 1992年。(Zorach Warhaftig: "Refugee and Survivor. Rescue Attempts during the Holocaust". Jerusalem. Yad Vashem. 1984.)
- 副島圓照「戦前期中国在留日本人人口統計」, 『和歌山大学教育学部紀要, 人文科学』(33) 1984年, 和歌山大学教育学部, 1~35ページ。
- Rena Krasno: "Strangers Always. A Jewish Family in Wartime Shanghai". Berkeley, California (Pacific View Press) 1992.
- 中日新聞社会部編『自由への逃走 - 杉原ビザとユダヤ人』, 東京新聞出版局, 1995年。
- ヒレル・レビン『千畝』(諏訪澄, 篠輝久訳), 清水書院, 1998年。(Hillel Levine: "In Search of Sugihara". New York. The Free Press. 1996.)
- 樋口季一郎『陸軍中将樋口季一郎回想録』, 芙蓉書房, 1999年。
- Hellmut Stern: "Saitensprünge. Erinnerungen eines Kosmopoliten wider Willen". Berlin (Aufbau Taschenbuch Verlag) 2000.
- 王替夫『見過希特勒与救過猶太人的偽滿外交官』, 黑竜江省人民出版社, 2002年。
- 阿部吉雄「上海のユダヤ人ゲッター設置に関する考察」, 『言語文化論究』(15) 2002年, 九州大学大学院言語文化研究院, 45~59ページ。

## Der Wendepunkt der Juden-Politik Japans vor dem Zweiten Weltkrieg

Yoshio ABE

Nach der Besetzung der Mandschurei im Jahre 1932 entführten der japanische Geheimdienst (Tokumukikan), die japanische Militärpolizei (Kempeitai) und die reguläre japanische Polizei im gesamten Besatzungsgebiet reiche Chinesen und Juden, um Lösegelder zu erpressen. Im Jahre 1933 wurde z. B. der französische Staatsangehörige Simon Kaspé, ein begabter Pianist und Sohn eines reichen Juden, in Harbin von Weißen Russen, die für den japanischen Geheimdienst arbeiteten, entführt und nach den gescheiterten Lösegeldverhandlungen ermordet. Bei dieser Affäre versteckten japanische Behörden zuerst die Täter, dann verhinderten sie eine gerechte Untersuchung des Falles und machten schließlich die Verurteilung der Täter ungültig. Dies hatte zur Folge, dass einige tausend Juden Harbin, wo es die größte jüdische Gemeinde in Fernost gab, verließen.

Zu jener Zeit plante Japan jüdische Techniker aus Deutschland, in dem unter der nationalsozialistischen Herrschaft die Juden verfolgt wurden, und jüdisches Kapital aus den USA zur Entwicklung der Mandschurei in das Besatzungsgebiet zu holen. Aber aufgrund heftiger Proteste von Juden aus der Shanghai-Konzession, den USA und England gegen die Kaspé-Affäre entschloß sich Japan, die in seinem Besatzungsgebiet lebenden Juden zu schützen. Japan wollte auf diese Weise vermeiden, den neugeschaffenen Vasallenstaat Mandshu-Tikuo als antisemitisch erscheinen sollten. Diese Politik ermöglichte es, dass Tausende von Juden aus Europa über die Mandschurei und Japan in die USA emigrierten und 18.000 jüdische Flüchtlinge in der Shanghai-Konzession Zuflucht fanden; was Japan eigentlich nicht beabsichtigt hatte.